

Q.2

新型コロナウイルス感染症の感染拡大に伴い、 大変なことはいろいろあったと思います。その中で、 あなたが一番困ったと感じたことはどのようなことでしたか？

田邊さん 運動不足になったことです。私は元々体を動かすことが好きですが、習慣的にスポーツをしているわけではなく、通学や散歩で運動不足を解消していました。でも、外出を自粛し、オンライン授業になったことで、生活用品を買いに出かけるくらいしか外を出歩く機会がなくなり、確実に運動が足りていないと感じ始めました。段々と体を動かしていきなさに恐怖を感じるようになり、家でのストレッチや家の周辺だけでも歩くことを心がけるようになりましたが、見える景色の変化が乏しいので、積極的に運動する気持ちを持ち続けることは大変でした。

田畑さん 私が一番困ったのは、大学での活動です。コロナ禍前は友達と雑談をしている中で仲良くなったり、得られる情報やアイデアがありましたが、オンライン授業になったことで一切新しい人間関係を築くことができなかつたことが困りました。

坪井さん 大学がオンライン授業になったことと、それに伴い対面の課外活動もできなくなったことです。先生も学生も慣れないオンラインでの授業に戸惑い、様々なトラブルが起きて対応するのに苦労しました。サークルもオンラインでやることになり、今までと同じようには活動できず、どうすればより良い活動ができるのかを常に考え、試してみる必要があり大変でした。

藤森さん アルバイトや外に必要なものを買に行くときなど、どんなときでもコロナの感染対策を念頭に置かなければならないことです。外食するときや、外でむせて一時的に咳が止まらなくなったときなどは特に、他の人からの視線が怖いです。

弓場さん バイトで接客する際にマスクとシートがあることによりなかなか声が伝わらなかったことです。もともと声があまり大きくはないので出来るだけ大きな声を出すように努めていますが、最初のころは周りの音も大きいのも相まって説明が上手く伝えられない時がありお客さんに怒鳴られたことなどがありました。

三島さん 様々な人々と関わりを持つことが少なくなったことに困りました。自粛生活で、家族とバイト先の人としか面と向かってコミュニケーションを取らなくなっただけでなく、オンライン授業が続く中で交友関係も狭くなり、ごく一部の仲の良い友人としか連絡を取り合わないようになりました。現在では、そのような状況に慣れてしまい、コロナ禍以前よりも新しい環境に飛び込むのが怖くなってしまいました。コロナ禍で人との関わりが少なくなったことで、少し消極的な性格になってしまったように感じます。

坂本さん イベントが無くなったり、参加できなくなったことです。高校生の頃からバンドの活動をしていましたが、ライブハウスが使えなくなり、練習場所も確保できなくなっているため、まったく活動ができなくなったのが悲しいです。また、コロナが流行する前は、ライブに行ったり、一人で東京へ遊びに行ったり、テレビの番組協力を参加したりと出かけていましたが、今はそれできなくなっています。楽しいことがあれば、それに向かってがんばろうとバイトや勉強のモチベーションを上げられますが、今は家で過ごすことが多いので、メリハリをつけることが難しいです。

Q.3

この1年余りの経験を通して、私たちを取り巻く社会について 感じたことはどのようなことでしたか？

田邊さん 私たちは、科学を信じ、専門家の意見を求めることで心の安定を得ようとしているのだなと感じました。新型コロナウイルスについての知識のない人が、知識のある人に意見を求めるというのは、自然なことだと思います。しかし、科学には新たな発見があるので、知識のある人がその意見を訂正することも当然あると思いますし、「現段階では」という曖昧な言葉を添える場合もあるはずですが、それに対して、「以前はこう言っていたじゃないか」、「はっきりと断言してほしい」など、その回答に苛立ちを表す発言を聞きました。現時点での科学が確実なものではないということを頭に入れて、専門家の意見を落ち着いて聞くことが大切だと考えます。

田畑さん コロナがあるからこれもあれもできない…となるのではなく、置かれた状況で最大限努力することが大事なんだと感じました。私たちは対面でサークルの活動をする事は制限されましたが、代わりにオンライン上での活動を始めました。飲食店ではお弁当のテイクアウトを始めたお店が多くありました。困難な状況が終わるのをただ待つのではなく、新しい状況に順応していく流れがあったと思います。

坪井さん マスクなどが一気に当たり前になったことに驚きました。今ではコロナ流行以前の、マスクをしていなかった頃の映像を見ると、「あれ？マスクは？」と思ってしまう。この1年で私たちに刷り込まれた、「マスクがないと飛沫が飛ぶ」という意識は、果たして流行が収まれば消えてくれるのだろうかと不安になります。今まではマスクがないのが当たり前だったのに、これから先一生歩いた時にマスクをしていない人を見ると、「うわっ、マスクしてないじゃん」と不快に思うのかもしれないと思うと、自分の思考が窮屈になってしまったようで悲しくなります。

藤森さん 最初の方はマスクが感染対策の一環にはならないと言っていたのに、しばらくするとマスクをすることが外でのマナーの1つになっていたり、ハンドドライヤーは感染リスクがあるからと使用中止になっていたのに最近になって感染リスクはないと言い出したり、ワクチンに関して副作用の噂がいろいろ出たり、何を信用すればいいのか全く分からなくなりました。

大阪で学ぶ学生は今

新型コロナウイルス感染症の感染拡大によって 私たちの生活はどう変わった？

私を感じたこと、 考えたこと。

新型コロナウイルス感染症が拡大し始めてから1年余りが経ち、「新しい生活様式」の中にはある程度私たちの暮らしに定着しつつあること、なかなか定着しにくいことなどがあるように思います。そこで今回は、この1年近くを振り返り、自分の生活の良かった変化、良くなかった変化などを、関西大学のみなさんにお伺いしました。



今回お話を伺った、
関西大学の7名の学生のみなさん

文学部 3回生 田邊 爽佳さん
文学部 3回生 田畑 菜月さん
文学部 3回生 坪井 菜央さん
文学部 3回生 藤森 萌花さん
文学部 3回生 弓場 裕香さん
社会学部 3回生 三島 彩香さん
文学部 2回生 坂本 怜衣羅さん

Q.1

新型コロナウイルス感染症拡大に伴い、いろいろなことが変化しました。 自分にとって一番良かった変化はどのようなことでしたか？

田邊さん オンライン授業を経験できたことです。初めてオンライン授業を受けたときは慣れないことばかりで戸惑いました。でも、オンライン授業の多くは、自分で受講する時間を選べますし、動画であれば一時停止や巻き戻しもできます。こういうオンライン授業の良さは、実際に経験しなければ分からなかつたと思います。その一方で、対面のほうが意見交換しやすいと感じたりして、授業方法の変化は対面授業の良さを感じる機会にもなりました。

田畑さん 自分自身と向き合う時間が増えたことです。以前は友達と遊びに行ったり、サークルの活動、バイトなど、毎日外に出たり人と会ったりしていました。しかし、コロナの感染が拡大し、家に籠る生活になりました。自粛期間中は、趣味の料理をしたり、本を読んだり、掃除をしたり、自分自身と向き合う時間が増えたことで「これをしたら私の心は満たされるな」ということがわかり、自粛期間が明けた後も過剰に人と交わることは無くなりました。世間的に不安定な時期のなかでも、自分自身と向き合うことによって心の安定を得られるようになったことが一番良かったことだと思います。

坪井さん 家での生活を見直すようになりました。自炊のレパートリーを増やしたり、部屋の荷物を整理したり、家の中でより快適に楽しく過ごせるような工夫をするようになりました。

藤森さん コロナウイルスが流行し、自粛しなければならなくなつたことで、自分の時間を多く持てたことです。

弓場さん 自分の趣味であるゲームや刺繍をしたり、気になっていた映画やアニメなどを見たりする時間が増えましたし、実家で暮らしているのになかなか料理をする機会がなかったのですが、前よりも少しできるようになったと感じました。

三島さん 自粛生活のため、自分が自由に使える時間が増えたことで、改めて自分自身について考えるようになりました。例えば「自分は何が好きなのか」や「自分はどんなことにお金や時間を費やしたいのか」など、今まで気にしたことなかったことを考えてみました。その結果、自分自身の強みやこれからの生き方などが見えてきました。自粛生活を通して、自分自身を理解できたことは良かった変化だと感じました。

坂本さん 私はパソコンなど機械類の操作がとても苦手で、パソコン操作を避けてきていましたが、大学に入り、リモートで授業を受けなければならなくなつたため、必然的にパソコンに取り組む必要が出てきました。それまで、タイピングが全くできなかったのですが、今では両手で正しくタイピングできるようになりました。また、おうち時間を充実させるためにそれまで興味をもっていなかったアニメや映画も見始めるようになり、興味の幅がかなり広がりました。そのおかげで、対面で大学生活が始まった際に友達との話題が広がったので良かったです。